



軒丸瓦の出土状態「赤沼古代瓦窯跡」地点

石田遺跡(第2・3次)発掘調査

- 調査期間 第2次 平成24年8月6日～24年11月30日
第3次 平成24年12月3日～25年3月末(予定)
- 調査主体 埼玉県比企郡鳩山町教育委員会

石田遺跡は、東日本最大の古代窯業遺跡である鳩山窯跡群(=南比企窯跡群)を構成する窯跡の一つで、昭和25年県指定史跡となった「赤沼古代瓦窯跡」、平成5年に発見され同じく県指定史跡となった「石田国分寺瓦窯跡」を含む遺跡です。

石田遺跡の調査概要

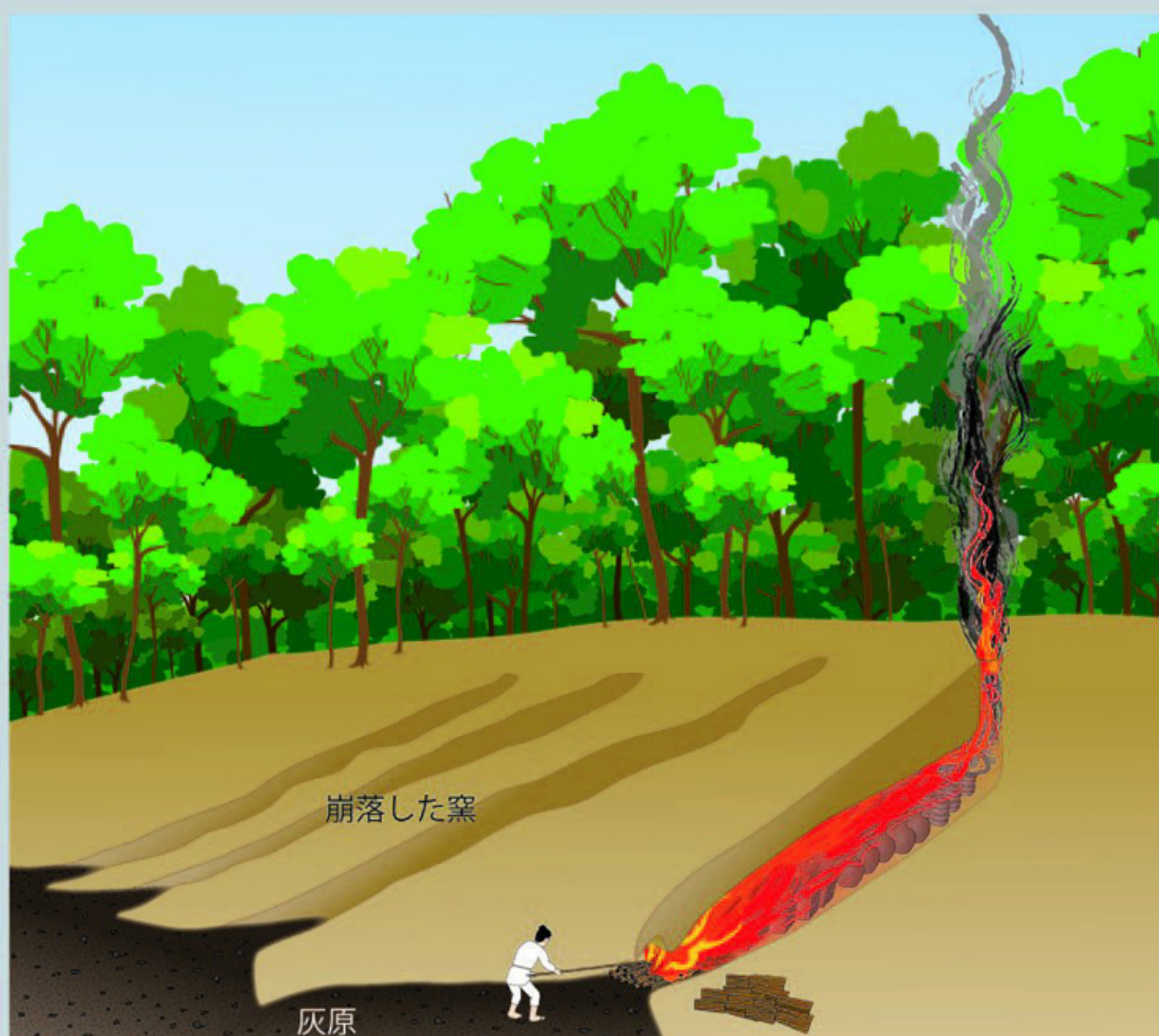
今回の発掘調査は、鳩山町が全国に誇れる文化財である窯跡群を保存・活用する準備として実施しているものです。地権者のご理解・ご協力のもと、トレンチという試掘溝を多用する方法で調査を進めたところ、新たに窯跡7、工房跡と推定される建物跡1、瓦溜まり遺構1が確認されました。

幅広い時期の窯跡を確認

過去の調査で確認されたものを含め、遺跡内にある窯跡は合計16です。これらは出土遺物の特徴から、7世紀末(白鳳時代)・8世紀後半(奈良時代)・9世紀後半～10世紀初頭(平安時代)の窯跡と判断されました。つまり石田遺跡には、古代鳩山における全ての時期の窯跡が存在している事が明らかとなりました。例えるなら、「古代鳩山の窯跡見本市」といったところでしょう。一般に窯跡は燃料等の関係で時代によって地点を変えている例が多く、今回の石田遺跡のような例は珍しいものです。古代鳩山人の計画的な燃料確保が偲ばれます。

また、今回の調査で発見された10世紀初頭の窯跡は、東日本における須恵器生産衰退期に相当するもので、その事例の少なさからも注目されるものです。

須恵器は全国的にみると、5世紀の初頭には畿内で生産が開始され、6世紀に全国に波及、奈良時代には日用品として普及しますが、関東地方では平安時代後半に消滅し、木や鉄の器に移行するようですが不明な点が多く、未だ多くの謎があります。今回の発見は、なぜ須恵器は消えていったのか?という謎にせまる上で、重要なカギとなるのかも知れません。



操業時の窯(イメージ)

白鳳時代の瓦窯跡「赤沼古代瓦窯跡」

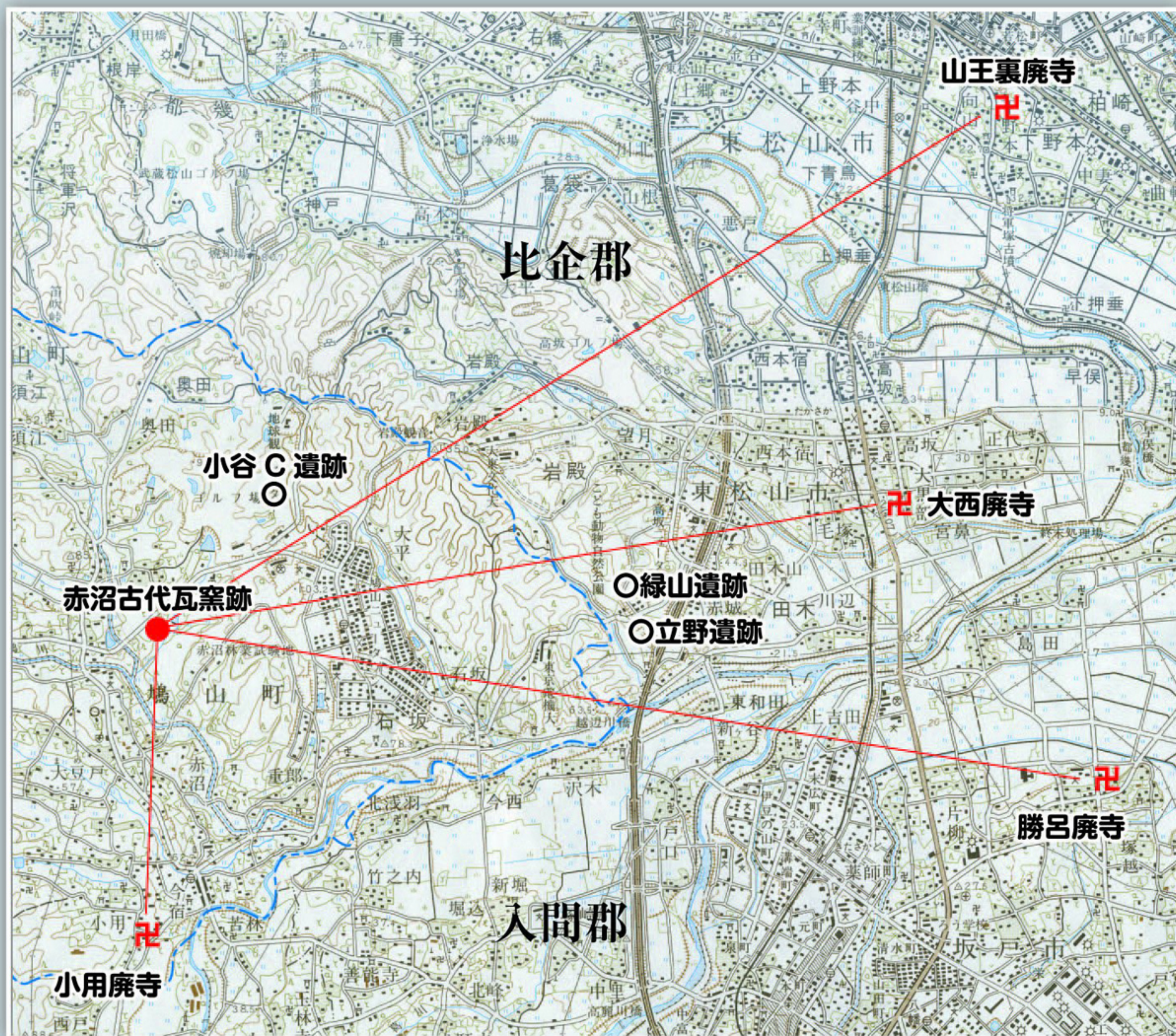
県指定「赤沼古代瓦窯跡」周辺の調査では、既に保存されていた窯跡の近くから、奈良時代より前の白鳳期(7世紀末)の瓦窯跡2基が新たに確認されました。これら窯跡は鳩山では最古の一群となりますが、瓦以外に多数の須恵器が出土することから、鳩山では瓦と須恵器の生産が同時に始まったことがわかりました。なお、生産された瓦は坂戸市勝呂廃寺や鳩山町小用廃寺・東松山市大西廃寺・山王裏廃寺といった、比企・人間両郡にまたがって分布する寺院に供給されています。

また、小谷C遺跡・緑山遺跡では同じ特徴の瓦が、立野遺跡では類似する須恵器が出土しており、赤沼古代瓦窯跡における製品の搬出経路を復元する上で興味深いものがあります。

いずれにせよ、これら遺跡は東日本における白鳳期の瓦生産を考えるだけにとどまらず、仏教文化の波及を考える上でも貴重な事例と言えます。



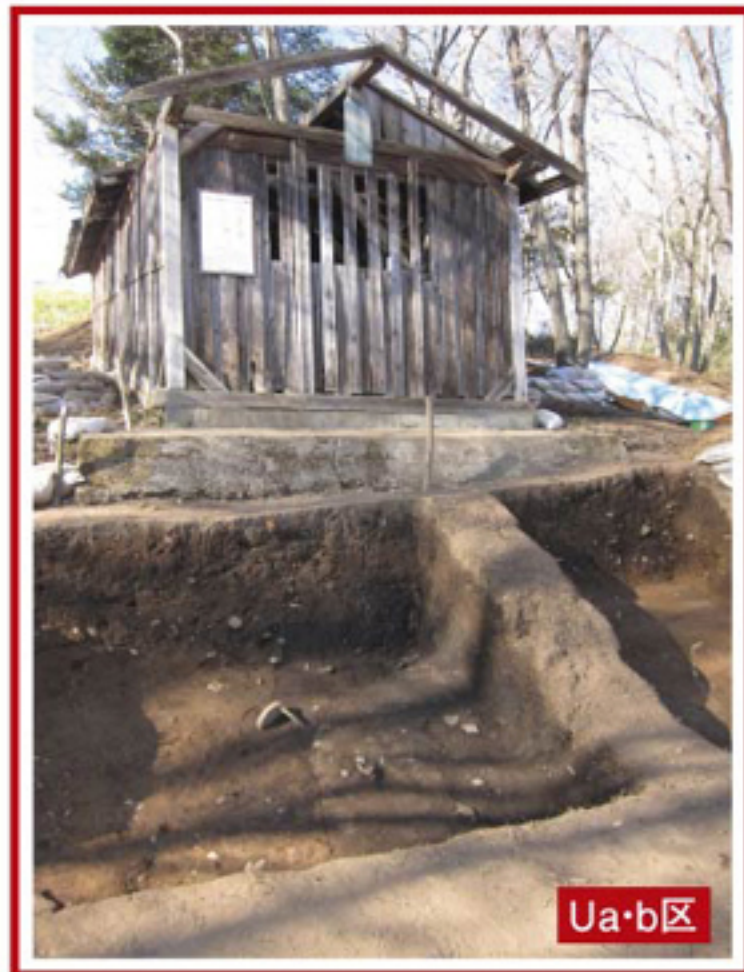
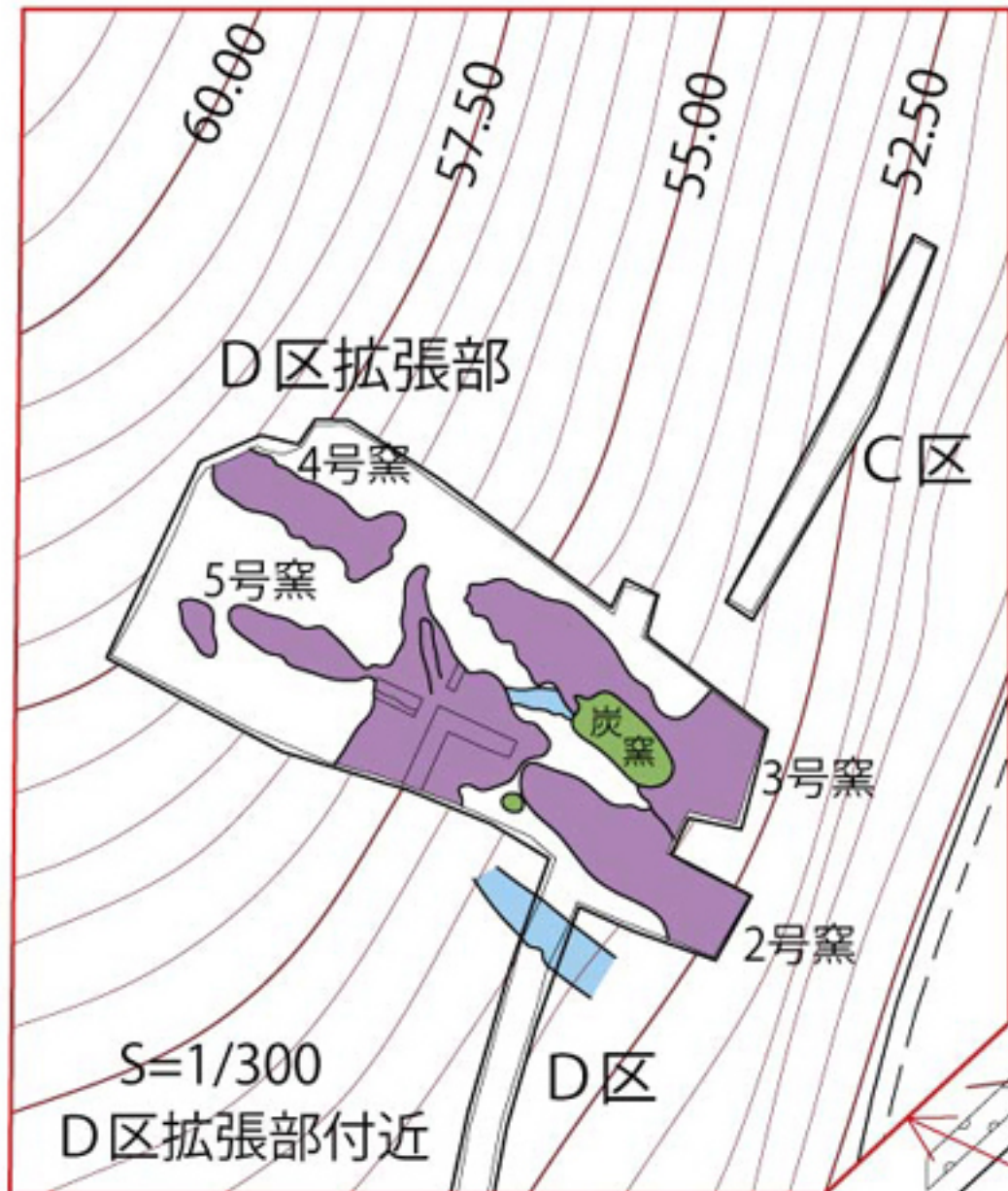
「赤沼古代瓦窯跡」で生産された軒丸瓦(一部)



「赤沼古代瓦窯跡」とその供給先寺院・関係遺跡



D区拡張部検出の窯跡(東から)
9c中葉の窯跡(2・3号)と9c末～10c
初頭の窯(4・5号)の位置関係



県指定史跡「赤沼古代瓦窯跡」地点

昭和25年、斉藤忠氏によって調査された。白鳳期の瓦陶兼業の窯跡。保存施設の改修にあわせて再調査を実施。過去の調査が窯体の焼成部のみで、焚口部は覆屋外であることが判明した。



複数枚が重なって
出土した平瓦。
接合率が高い。

Q区の瓦溜まり遺構(南東から)

多数の瓦が集中して出土。不正方形の掘り込みの中から、遺存状態の良い瓦が集積されたかのように出土。選別に伴い廃棄されたものと考えられる。時期は「赤沼古代瓦窯跡」と同じ白鳳期。



鳩山最古の窯跡石田1号窯
平成5年調査。陶製仏殿等を焼成。



8号窯(8c末)と9号窯(7c末)の検出状況(南東から) 約1世紀時期の離れた窯の重複

